

(単元) 文章を読んで, 人物, 情景, 心情を的確にとらえ読み深める。

(『山月記』中島敦)

(本時のねらい)

生徒は, 今までの文学作品における「読むこと」の学習で, 文章の構成, 展開, 要旨などを的確にとらえる力を身に付けてきた。この教材『山月記』は, 登場人物の心理的葛藤や心理の変化に目を向けていくことで, 生徒一人ひとりの個性的な読みが可能となり, 同時に文章表現に即して内容を読みとる力を身につけることができる。虎と人間の心の狭間で揺れ動く登場人物の心情や芸術に対する執着心に触れ, 作中の人物に共感や疑念を抱きながらも, 自らの体験や価値観と比較させたいと考えて設定した。

(ICT活用方法)

主人公「李徴」の「生き方」に焦点を当て, 自分の考えや意見をまとめ, 授業支援アプリに入力し, それを活用してグループ内やHR全体で意見を共有するとともに作品について理解を深める。

(本時の展開)

時間	学習活動	指導上の留意点	ICT活用方法
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学習を振り返り, 本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの学習を確認させ, 本時の目標を説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ICT (電子黒板) を用いて, これまでの学習内容を提示する。
展開 35分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">1 自分の妻子を顧みず, 自分の求めるものを追いつけた李徴の生き方について賛成か, 反対か, 考える。</div> <ul style="list-style-type: none"> これまでに学習した本文の内容や表現を根拠にして各自授業支援アプリに立論する。 	<ul style="list-style-type: none"> テンプレートの括弧内に記入させる。 すぐに解答例を提示せず, 自由に考えさせる。 李徴の生き方について賛成か, 反対か, 本文中の任意の箇所を根拠にして考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の意見を電子黒板に映し, 状況を共有して理解させる。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">2 数人の記述を, 順に紹介 (発表) する。</div> <ul style="list-style-type: none"> 自分の立場と立論を発表する。 自身と異なる人の意見を聞き, 考えを深める。 		
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">3 4人程度の班に分かれ</div>		

	<p>て、立論に対する質問を同じ班の他の3人に対して書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の立論に対して、異なる視点からの意見を述べる。 <p>4 自分への質問に対して、根拠を示して、自分の考えを書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分とは異なる視点からの質問に答えることを通して、読みを深める。 ・最終的な意見をワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・立論に使われた複数の根拠に対して、質問を書くように促す。 ・指摘された質問に関わる本文の箇所を再度読み直し、質問に答えるようにさせる。 	
<p>まとめ 5分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のまとめと次時の予告を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次時への意識付けをさせる。 	

(授業の様子)



各自の意見を共有する



グループワークの様子

(生徒の反応と課題、改善を要する点)

生徒一人ひとりが1人1台端末や教育ICTを効果的に活用できる授業実践を課題とした。1人1台端末活用が目的になるのではなく、「国語」「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域において、生徒がペアワークやグループワークを通じて主体的・対話的・協働的に学ぶことを目指した。具体的には、授業支援アプリを活用し作成したワークシートを配布した。まずは1人1台端末を用いて個人でワークシートに記入し、内容を画面で共有した。次にグループワークを行い意見を考察した。

今回の授業実践では1人1台端末上でグループワークや意見交換・共有できるように工夫した。ただ、教室のネット環境や生徒の操作技術によって個人差ができ、生徒が集中で

20104 現代文 B_1_協働_「山月記」

きる場面が少なかった。また、指導者が生徒の反応を観察するよりも1人1台端末の操作に集中する機会が多くなったのでICTを使用するのがすべての時間なのか、一部の時間なのか、使用するねらいを明確にすることが重要だと感じた。教科の観点から縦書きは1人1台端末上では見にくく共有するときも文字が小さくてなかなか厳しいと感じた。今後の課題として、文字の分量や大きさを改善し、1人1台端末の操作に振り回されない授業実践を目指していく。